

青年期の自尊感情と部活動に対する認知との関連

高田知恵子*, 丹野義彦*, 高田利武**

*群馬大学医療技術短期大学部

**群馬大学教育学部

(1985年11月20日 受理)

Relationship between Adolescent Self-Esteem and Cognition of School Club Activities

Chieko Takata*, Yoshihiko Tanno* and
Toshitake Takata**

*College of Medical Care and Technology, and

**Faculty of Education, Gunma University,

Mebashi, Gunma 371 Japan

Key Words : Self-Esteem, School Club Activities, Mental
Hygiene

序 文

青年期における不適応の1つに、登校拒否、いじめなどの学校不適応がある。なかでも昨今は、単に勉学上の悩みだけではなく、「部活動」に起因する不適応が目立ってきているようである。

最近大きな話題となった、県内某中学での中学生の自殺の直接の引金になったのも、部活動に伴ういじめであった。新聞の投書欄にも、部活動に関する批判や問題提起が数多く見られる。「もっとゆとりのある部活動はできないのか」「自由時間を減らして非行化を防ぐのが学校のねらいか」「個人が楽しんでいては駄目で、決死で休む時間もなく打ち込まねばならない部活動のあり方は疑問だ」「中学生には息抜きは不要なのか」等の内容である(1)。

一方、登校拒否を従来からの母子分離不安説、父親問題説等から捉えるのではなく、「学校の問題」として学校現場のあり方を問い直そうとする傾向が、近時、児童精神科領域で見られる(2)。過度に組織的・目標指向的・訓練的な部活動のあ

り方が登校拒否を生む原因の1つになっていることは、「耐性が身につけていない生徒」の場合、という限定条件つきながら、文部省もこれを認めている(3)。

先に筆者らは、部活動が中学生の精神衛生に与える影響について検討した(4)。臨床経験や女子短大生へのアンケート調査によれば、中学生生活の中で、部活動が時間的に大きな部分を占めていること、部活動の中で対人関係のつまづきや役割上の問題があり、それが不登校やヒステリー反応の主因または促進因子になっていることが認められたのである。

青年期が「自我」の再構成期であることは、青年心理学研究者の一致して指摘するところである(5)。また、その過程におけるつまづきを、青年期の不適応をもたらす要因として捉え得ることも、多くの研究者が指摘している(6)。今、青年期不適応の原因あるいは促進因子の1つとして部活動が挙げられている故、「部活動」体験と青年の「自我」のあり方との間に、何等かの関係があるのではないかと考えられる。

そこで本研究では、①過去に「部活動」を体験した者が、それをどのように受け止めているか、②その受け止め方が、その者の現在の「自我」のあり方とどのような関係を有しているか、を検討することを試みる。その第1歩として前者に関しては、前報に引き続き女子学生を対象に、中学時代の部活動に対する認知の構造を因子分析的に吟味する。後者については、自己全体に対する感情的評価である自尊感情 (self-esteem) の高低と、部活動への認知との関連の有無を検討する。

方 法

調査対象者：女子学生（群馬大学教育学部，群馬大学医療技術短期大学部，群馬県歯科衛生士専門学校）合計 297 名に対して，質問紙調査を実施した。このうち，中学時代に運動部の部活動を行っていた者 248 名を，分析の対象とした。対象者を運動部活動を行っていた者に限定したのは，文化部の活動を行っていた者が比較的少数であったため，および，症例等から運動部活動に多くの問題の存在が推量されるためである。

手続き：1. 部活動に対する認知の調査。46項目からなるリカートタイプの5段階評定尺度によって調査を行った。46の調査項目は，前回の調査結果（4），部活動に対する中学生の書いた感想

文，大学生の自由記述による回想，等に基づいて決定したものである。

2. 自尊感情の測定。Rosenberg (7) の自尊感情測定尺度によった。10項目の5段階自己評価を求めるものである（邦訳は星野（8）による）。Rosenbergによれば，自尊感情は「自己像の中核的概念で，1つの特別な対象たる自己に対する，肯定的あるいは否定的な態度」である。本尺度により，自己を肯定的または否定的に評価している程度が測定されると解釈される。

これら2つの調査は，同一の質問紙に記載されており，教室にて無記名で一斉に施行された。なお調査は1985年6月から9月にかけて行われた。

結 果

1. 部活動に対する認知

中学時代に体験した部活動に対する，調査対象者の認知の構造を分析するため，46の調査項目に対する5段階評定の回答を，因子分析(主因子解)によって解析した。累積寄与率が60%を越えた20因子についてバリマックス回転を行い，固有値1.00以上であった8因子を解釈した。それらの因子を表1に示したが，その概略は以下のとおりである。

表1. 部活動に対する認知の因子分析

因子名 (寄与率・固有値)	項 目	因 子 負 荷 量
1. 自己鍛錬・向上 (23.12%) (6.34)	友人ができて良かった	.593
	他校との交流ができて良かった	.571
	責任感が強くなった	.650
	情熱を注ぐことができた	.695
	自信がついた	.675
	根性がついた	.820
	視野が広がった	.891
	積極的になった	.853
	学校の方針なので仕方なくやった	-.513
	自分のためにプラスになった	.835
	技術が向上した	.782
	体が丈夫になった	.736
	人間的に成長した	.932
行儀が良くなった	.809	

因子名 (寄与率・固有値)	項 目	因 子 負 荷 量
2. 集団雰囲気 (8.62%) (3.41)	家庭的な雰囲気だった	.608
	民主的な雰囲気だった	.751
	封建的な雰囲気だった	-.920
	先輩との関係がうまく行かなかった	-.672
	上下関係が厳しかった	-.885
	不公平な事が多かった	-.758
	自由でなかった	-.753
	1年の時は下働きばかりでいやだった	-.691
3. 不本意な参加 (3.74%) (2.11)	やめたかった	.895
	やめたかったが、やめられなかった	.952
	中学で一番いやな思い出	.690
4. 希薄な集団関与 (2.83%) (1.51)	リーダーシップが発揮できた	-.878
	責任感が強くなった	-.565
	部員をまとめるのに苦労した	-.586
5. 指導者との葛藤 (2.33%) (1.64)	先生から良い影響を受けた	-.790
	先生との関係がうまく行かなかった	.915
	チームワークの良さを知った	-.544
	試合が良かった	-.521
6. 生活への支障 (2.11%) (1.52)	練習が辛かった	.520
	勉強との両立が大変だった	.900
	他のおけいこ事がよくできなかった	.781
	家庭での時間が少なくなった	.872
7. 否定的同輩関係 (1.76%) (1.21)	同輩との関係がうまく行かなかった	.921
	楽しい思い出ばかりだ	-.500
8. 達成欲求 (1.68%) (1.66)	自分の才能が発揮できなかった	-.698
	自分のやりたい事ができた	.606
	情熱を注ぐ事ができた	.589
	自信がついた	.606

第1因子：「自己鍛錬・向上」の因子。部活動参加によって、個人的にプラスになったこと、あるいは、自己を鍛錬して人間的に成長したことに関係する因子である。

第2因子：「集団雰囲気」の因子。部活動で参加した集団が、家庭的あるいは封建的である、上下関係が厳しい、自由である等、集団の雰囲気に関する因子である。

第3因子：「不本意な参加」の因子。やめたかった、やめたいがやめられなかった、いやな思い出である、の3項目からなる部活動への消極的な構えを示す因子である。

第4因子：「希薄な集団関与」の因子。リーダーシップの発揮、責任感の向上、部員をまとめる経験とは逆の傾向を現す、無責任・希薄な集団への関与を示す因子である。

第5因子：「指導者との葛藤」の因子。部活動を指導する教師からの必ずしも良くない影響や、教師との否定的関係に関する因子である。

第6因子：「生活への支障」の因子。部活動に時間を取られることから生じる、他の生活への支障に関する因子である。例えば、勉強や稽古ごととの両立の問題、家庭で過ごす時間の減少等である。

第7因子：「否定的同輩関係」の因子。同輩との否定的な関係に関する因子である。

第8因子：「達成欲求」の因子。才能の発揮や、自己実現・自信等、いわば達成欲求に係わる因子である。

以上、抽出した8因子の全変動に対する寄与率が必ずしも高くないため問題は残されるが、調査対象者の中学時代の運動部活動への認知は、大きく8つに類別できると言える。

2. 部活動への認知と自尊感情との関係

a. 自尊感情の高低による調査対象者の分類：まず、自尊感情測定尺度の内容を検討するため、主成分分析を行ったところ、第1因子の寄与率は高く(39%)、第2因子の寄与率は低かった(12%)。これは先行研究(9, 10)の結果と一致す

表2. 部活動の認知と自尊感情との関係

因子	自尊感情高群 (n=53)	自尊感情低群 (n=48)	t (df=99)
1.自己鍛錬・向上	2.18 (0.75)	2.68 (0.86)	3.12**
2.集団雰囲気	2.75 (0.84)	3.21 (0.75)	2.86**
3.不本意な参加	4.16 (0.96)	3.69 (1.18)	2.20*
4.希薄な集団関与	3.17 (1.10)	2.76 (0.95)	1.97?
5.指導者との葛藤	3.36 (0.92)	3.09 (0.96)	1.47
6.生活への支障	3.37 (0.99)	3.14 (0.94)	1.23
7.否定的同輩関係	3.43 (0.99)	2.93 (1.13)	2.36*
8.達成欲求	2.58 (0.91)	3.16 (0.97)	3.09**

数値は5段階評価(1~5)。()内は標準偏差。** $p < .01$ * $p < .05$? $p < .10$
第1, 2, 8因子については数値が高いほど、部活動を否定的・消極的に、第3, 4, 5, 6, 7因子については数値が高いほど、部活動を肯定的・積極的に評価していることを示す。

る。そこで、第1因子に負荷が低く第2因子に負荷の高い1項目を除外し、残り9項目の合計点をもって、調査対象者の自尊感情得点とした。

次に、自尊感情測定尺度への回答が不完全であった者1名を除いた247名について、自尊感情得点の平均(28.09)、標準偏差(6.24)を算出した。この結果に基づき、平均+1標準偏差以上の得点の者を自尊感情高群、平均-1標準偏差以下の得点の者を自尊感情低群とした。前者は53名、後者は48名である。

b. 自尊感情と部活動への認知との関係：部活動への認知を構成する8因子のそれぞれに対して、自尊感情高群と低群の認知に差があるか否かを検討するため、自尊感情高群と低群の各々について、各因子毎に、その因子に含まれる項目の点数の平均値を求め、その平均の差の検定を行った。その結果は表2に示すとおりである。自尊感情の高低による有無差が得られたのは、第1, 2, 3, 7, 8の5因子であった。第4, 5, 6因子では、差は認められなかった。各々について具体的に記せば以下のとおりである。

第1因子：「自己向上・鍛錬」の因子。自尊感情高群と低群の間には有意差があり、高群は、視野が広がった、積極性・根性が養われた、技術が向上した等、部活動を自己鍛錬・向上に寄与したものとしてとらえている。

第2因子：「集団雰囲気」の因子。自尊感情高群は部活動集団を、より良い、自由な、民主的な雰囲気であるととらえているのに対し、低群は、より厳しい、不公平な、封建的な雰囲気であるととらえており、両群間には有意な差がある。

第3因子：「不本意な参加」の因子。自尊感情高群は低群より、部活動への参加を有意に不本意ではないととらえている。

第4因子：「希薄な集団関与」の因子。両群間に有意な差は認められなかった。しかし、自尊感情高群は、集団関与が強い傾向があり($p < .10$)、低群はその度合いが

希薄である。

第5因子：「指導者との葛藤」の因子。両群間に有意な差は見られなかった。両群とも、指導者との関係や影響については、特に肯定的でも否定的でもない中間的な態度をもっている。

第6因子：「生活への支障」の因子。両群間に有意差は見られなかった。両群とも中間的なとらえかたをしている。

第7因子：「否定的同輩関係」の因子。両群間に有意な差がみられた。自尊感情高群は同輩と良い関係、低群は不良な関係であったと見なしている。

第8因子：「達成欲求」の因子。両群間に有意差が認められた。自尊感情低群は高群よりも、達成欲求が満たされなかった、才能が発揮できなかったと、とらえている。

考 察

1. 部活動に対する認知

以上のように、今回の調査対象者は、自分達の中学時代の部活動体験について、自己の鍛錬・向上、集団雰囲気、不本意な参加、希薄な集団関与、指導者との葛藤、生活への支障、否定的同輩関係、達成欲求、の8つの側面からとらえていることがわかった。

これらの因子は更に3つのカテゴリーに分けることができると思われる。第1は、第1因子と第8因子、すなわち、自己の人間的成長と自己実現に関するカテゴリーである。根性、情熱を注ぐ、積極的等、スポーツ漫画的なイメージに対応する。第2は、第2因子、第4因子、第5因子、第7因子のグループで、集団雰囲気、他者との関係、集団への関与度の問題等、集団としての部活動のあり方に関わるカテゴリーである。第3は、第3因子と第6因子で、不本意な参加や他の生活への支障という、部活動による時間的・心理的制約に関するカテゴリーである。

これら3つのカテゴリーは、部活動に伴う基本的な問題点を端的に示しているように思われる。部活動は、青年期における自己向上欲求や自己実現、達成欲求などと大いに係わっている。自己向上や自己実現に積極的に取り組むことが、自我同

一性達成の条件の1つであることは言うまでもない。すなわち、部活動は青年期での自我同一性達成に重大な影響を及ぼすものと考えられよう。

このように部活動に大きく関与すること、あるいは組み込まれることは、時間的・心理的に大きく中学生の生活に喰い込んでゆく訳で、否応なしに中学生の他の生活側面にも影響を及ぼしている。練習が厳しい、やめたいのにやめられないという心理的重圧になったり、勉強や他の趣味等との両立の困難性、家庭生活へのしわ寄せ等、部活動に時間を取られ他のことができないという事態をも招き兼ねない。

更に、部活動は集団組織の中で行われるものであり、そこに集団生活に伴う様々な問題をもはらんでいる。中学生にとって、生徒自身の集団の自主的運営は初めての体験である。集団成員としての役割を担って集団の雰囲気に馴染んでゆくことや、生徒同士や指導者である教師との対人関係のあり方を経験することは、青年の自己形成にとって意味のあることであろう。しかしながら集団が過度に組織重視的な方向をとった場合、集団生活は逆にかなりのストレスとなる可能性や、集団からの逃避傾向が生じるのも当然である。

2. 部活動への認知と自尊感情との関係

自尊感情の高低によって有意差の生じた5因子について検討すると、自尊感情低群の方が高群よりも、部活動に対してより否定的なとらえ方をしていることがわかる。部活動を自己の鍛錬・向上に関して意義の少なかったものとしてとらえており、また、集団の雰囲気をより厳しく封建的であると受け止め、不本意な参加であることが多く、同輩関係が不良で、達成欲求も満たされない方向に評価している。

自尊感情の低い者は、自信が欠如し、有用感が乏しく、不全感が強い(7)。自分を表現し、自分らしく振舞うことが困難で、気楽になれず消極的である。そのような者が、集団場面で、自己の能力を発揮し対人関係を調整しながら、運動部活動を勉強等と両立させて行くのは、かなりの努力を要することであろう。集団の中で自己実現を計るためには、自己主張の能力、積極性、自信が必要である。

自己実現が計れない集団では、所属していても集団への帰属意識も乏しく、また、やめたいと思ってもやめる勇気が持てず（内申書に影響するとなればなおさらである）、不満足なまま過ごしてしまうことになる。また、能力発揮できない集団成員では、他の成員から重要視されることもなく、友人関係にも問題が生じるかもしれない。したがって、自尊感情の低い者に、部活動が不適応を引き起こす可能性が強いことが考えられる。臨床場面で我々が接する学校不適応青年には、概して自己評価の低い者が多いようである。この点について、今後、症例を検討してゆく必要があるだろう。

調査対象者の一部には、部活動の良かった面と悪かった面について自由記述を求めた。その結果、良い面としては、チームワークの良さ、優勝できた、友人ができた、一つの事をやり遂げたという満足感、等が挙げられている。一方、悪い面としては、厳しい練習、自分の時間がない、試合に負けた、等の面と共に、対人関係に関するものが非常に多く挙げられている。友人との仲たがい、妬み、レギュラーとそうでない者との差別、先輩が意地悪で厳しい、自分自身が後輩をいじめた、部内での対立、指導教師への不満、等である。

部活動は、生徒の自主的運営による集団活動であり、勉学以外の面でも、幅広い関心や体験を身につけ、自己形成を計る機会を作る重要な場である。しかし、個々人の自由を奪って集団に埋没させるような集団中心主義、試合に勝つことのみを至上目的とする練習のあり方、合理性を欠いた根性主義には大いに問題がある。特に自尊感情の低い者にとって、部活動はストレスの引金になることも充分考えられる。

中学時代は同輩・仲間との接触を通じて、人格が再構成されはじめる時期である。その時に、部活動という中学生生活の大きな部分を占める場で不適応が生じたとすれば、その後の人格形成に悪い影響を及ぼすと考えられる。都筑ら（4）は臨床例を通じてこの可能性を示唆している。本調査は遡行的調査であるため、中学時代における否定的な部活動体験と、青年後期における自尊感情の低さとの因果的關係は、必ずしも明らかにし得ない。また、従来男子に比べて学校不適応を起し難い

とされている女子（11）を調査対象としている点に問題が残される。しかしながら、今回の調査結果は、都筑ら（4）の示唆をある程度裏付けているといえよう。今後は、男子青年について調査を実施するとともに、臨床場面での症例についても更に検討を加える必要があると考えられる。

ま と め

1. 中学校の部活動に起因する青年期の不適応が問題となってきている。そこで、①部活動が現代の青年にどのように認知されているのかについて、女子学生（大学生、短大生、専門学校生）248名を対象に、質問紙調査を行った。また、②青年期は自我の再構成期であり、不適応はその過程でのつまづきとして考えられる。部活動が不適応の促進因子として挙げられている故、部活動と自我のあり方との間の関連を検討するため、自尊感情の高低と、部活動への認知との関連の有無を調べた。

2. ①については、因子分析の結果、部活動への認知に関して次の8因子が抽出された。「自己鍛錬・向上」「集団雰囲気」「不本意な参加」「希薄な集団関与」「指導者との葛藤」「生活への支障」「否定的同輩関係」「達成欲求」の各因子である。

②については、自尊感情の高低と「自己鍛錬・向上」「集団雰囲気」「不本意な参加」「否定的同輩関係」「達成欲求」の5因子との間の関連が認められた。すなわち、自尊感情の低い者は高い者よりも、部活動を自己向上に役立つ度合が少なく、集団の雰囲気が不良で、不本意な参加をし、同輩関係も悪く、達成欲求が満たされなかった、と認知している。自尊感情の低い者の方が、部活動を否定的に見なしており、部活動でよりストレスを感じて不適応に陥る危険性が高いと考えられる。

3. 部活動は中学生による自主的活動であり、勉学以外の貴重な体験の場であるが、集団中心主義、根性主義、優勝至上主義は、中学生の人格形成上、問題が大きいという、部活動のあり方への問題提起を行った。

謝 辞

本研究は、故都筑等教授の示唆によるところが大きい。ここに故都筑等教授に心から感謝し、謹んでご冥福をお祈りいたします。

引用文献

- (1) 朝日新聞 1985年7月26日朝刊第12面
ひとときレポート：部活動をめぐって、
- (2) 若林慎一郎：登校拒否と現代社会(シンポジウム)，児童青年精神医学とその近接領域，25：78-97, 1984
- (3) 文部省：生徒の健全育成をめぐる諸問題
—登校拒否問題を中心に— 一中学校・高等学校編一，大蔵省印刷局，1985
- (4) 都筑等，高田知恵子，関谷務：いわゆる部活動の中学生の精神衛生に与える影響，群大医短紀要，5：49-55, 1984
- (5) 古沢頼雄：人格形成の過程，青年の性格形成(現代青年心理学講座第4巻 宮川知彰(編))，pp. 43-82，金子書房，1973
- (6) 植田千晶：青年期の不適應問題，青年心理学(教職心理学講座第3巻 都留宏(編)) pp. 233-259，第一法規，1981
- (7) Rosenberg, M. 1970 Society and Adolescent Self-image. Prenceton Univ. Press.
- (8) 星野命：優越感の心理・劣等感の心理。青年心理，33：6-20, 1982
- (9) 山本真理子，松井豊，山成由紀子：認知された自己の諸側面の構造，教育心理学研究，30：64-68, 1982
- (10) 木村由利子：自己概念の認知の諸側面と Self-esteem 側面との関連，群馬大学教育学部卒業論文(未公刊)，1985
- (11) 笠原嘉：今日の青年期精神病理像。笠原嘉・清水将之・伊藤克彦(編) 青年の精神病理 I, (笠原，清水，伊藤編) pp. 3-27，至文堂，1976